平成２４年／社会教育による地域の教育力強化プロジェクト

【地域を学ぶ場に変えるコーディネーター養成講座】

成果報告書

NPO 法人 NEWVERY
（おとな大学）

もくじ

もくじ　……　1

1．「地域を学ぶ場に変えるコーディネーター養成講座」概要　……　2
(1)講座の目的
(2)実施体制
(3)講座の全体像
(4)講座全体スケジュール、各回テーマ
(5)講師プロフィール
(6)講座の参加者数、広報について

2．「地域を学ぶ場に変えるコーディネーター養成講座」
全 10 回　実施報告　……　11

3.「企画」から「実践」へ　……　29
実践の2チーム（こども班、異業種チーム）について

4．総括　（講座が活かされた点、改善点、今後の展開など）　……　37

5．資料集　（企画書、プレゼンテーション資料など）……　41

1.「地域を学ぶ場に変えるコーディネーター養成講座」概要

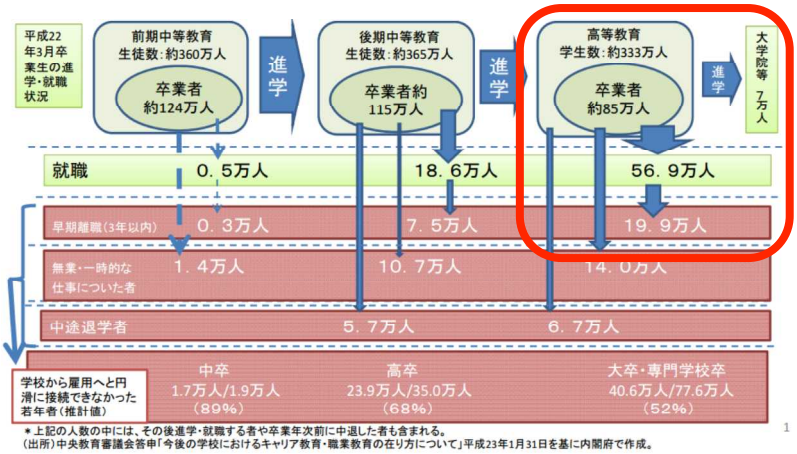
(1) 講座の目的

解決すべき地域の課題(地域の現状)

■学校から社会に接続できなかった若年層の課題

◆大学に入学する人数を 100 人と例えると、「8 人」は中退し、「17 人」は無業もしくはフリーターになり、「67 人」が就職するものの、その内の 3 割となる「23 人」は 3 年以内に離職してしまうのが現状。(図 1 より)
◆大卒でも 2 人に 1 人が雇用に課題を抱える社会。社会的弱者となる前の「予防的対策」が必要

内閣府が実施している政策会議、雇用戦略対話(第 7 回)の報告によると、平成 22 年 3 月時点において、合計で 66.2 万人の若者が学校から雇用に円滑に接続できなかったことが示された。(図 1)
当 NPO 法人で行っている「日本中退予防研究所」という事業の調査において、彼らの背景にはキャリアデザインの不足や学生支援の仕組み不足があることが明らかになっている。また一度ニートやフリーターの状態に至った若者が社会的にキャリアを積むためには多大な人手と時間が必要である。今後経済不況が続くと予想される中で、社会的弱者となる前の「予防的対策」がより必要になると思われる。



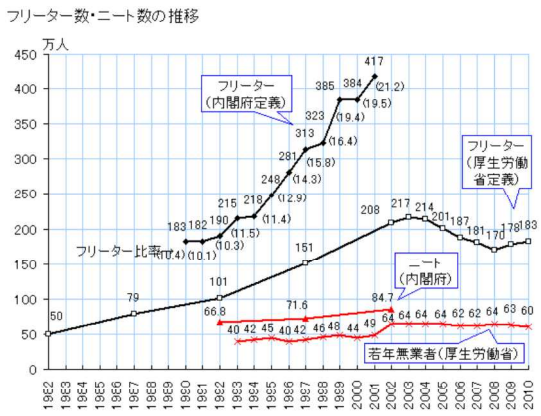


図 1 出典 内閣府 平成24年3月19日 雇用戦略対話(第7回)より

表 1 出典 厚生労働省 平成23年版労働経済白書よ

■　若者を社会につなげるための取り組みで見えてきた課題

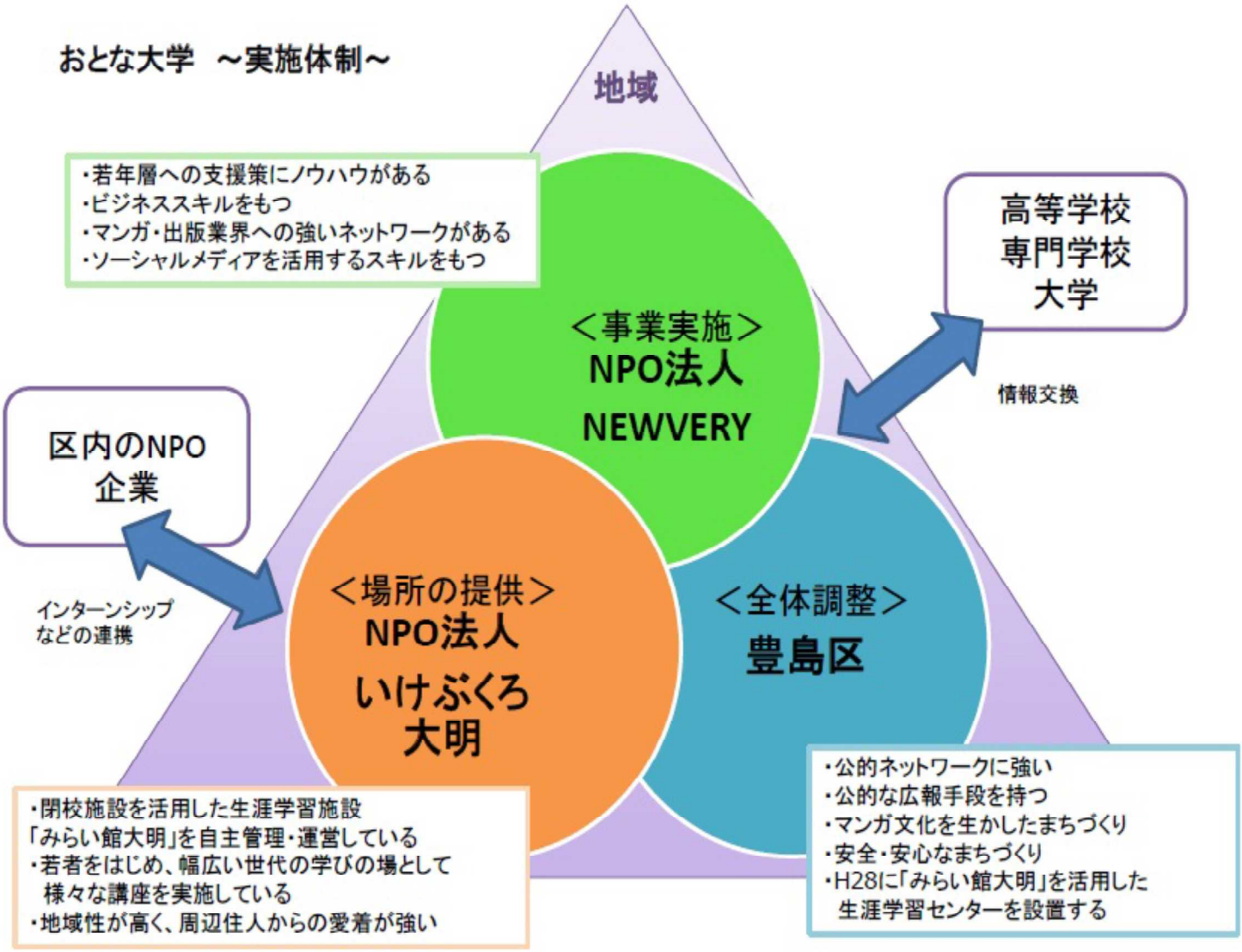
◆学校教育段階での学習意欲の低下、キャリア意識の不足による中退問題・離職問題
◆周囲の若者を巻き込み、地域資源を活かすことのできる「コーディネーター」の必要性

当NPO法人では、豊島区と生涯学習施設みらい館大明（NPO法人いけぶくろ大明）との三者協働で、平成23年11月より、豊島区生涯学習センターモデル事業「若者支援事業」として「おとな大学」という取り組みを行ってきた。≪若者が大人になる場所≫をコンセプトとして、多様な大人に出会うセミナーや他大学同士の交流会等を実施し、約半年間で述べ553名が参加した。この事業の参加者アンケートなどから、自らの人生を考えるキャリアデザインの機会や経験があるかどうかは、若者が所属している高等教育機関や企業の取り組みによって大きく格差があることが明らかになってきた。

一方で学習意欲が低い、働くことに意味が見出せない、といった本来おとな大学で学んでもらいたい若年層に対してはまだ十分にアプローチしきれていないという課題も見えてきた。また事業をともに実施するみらい館大明は、地域住民や地元商店との関わりが深く、幅広い年齢層が集う場所であるものの、このような地域資源を活かしきれていない。これらの課題に対して、意識が高く何か地域で活動したいと考えている若者自身を「コーディネーター」として育成し、それぞれの周囲の学生や社会人を巻き込むことで、若者の社会的転落の予防という問題に取り組みたいと考える。

豊島区で実施している若者支援事業「おとな大学」をフィールドとして、若者自身が同じ目線で事業を企画運営していける仕組みを構築するために、「地域を学ぶ場に変えるコーディネーター養成講座」（2012年9月22日～2013年12月15日／全10回）を実施した。

（2） 実施体制


おとな大学 ～実施体制～
地域
・若年層への支援策にノウハウがある
・ビジネススキルをもつ
・マンガ・出版業界への強いネットワークがある
・ソーシャルメディアを活用するスキルをもつ
＜事業実施＞
NPO法人
NEWVERY
高等学校
専門学校
大学
情報交換
区内のNPO
企業
インターンシップ
などの連携
＜場所の提供＞
NPO法人
いけぶくろ
大明
＜全体調整＞
豊島区
・閉校施設を活用した生涯学習施設
「みらい館大明」を自主管理・運営している
・若者をはじめ、幅広い世代の学びの場として
様々な講座を実施している
・地域性が高く、周辺住人からの愛着が強い
・公的ネットワークに強い
・公的な広報手段を持つ
・マンガ文化を生かしたまちづくり
・安全・安心なまちづくり
・H28に「みらい館大明」を活用した
生涯学習センターを設置する

（3） 講座の全体像

「地域で育む　豊島区若者支援事業コーディネーター育成プログラム」全体像

若者向け社会教育事業
（既存の事業）

成長して支援者に移る

対象

- 社会での経験が不足している若者（主に 15 歳~29 歳）
- 自分で考える経験が不足している
- 多様な他者との出会いが不足している
- 行動を実践する機会が不足している

事業概要

目的：若者が未来に希望を持ち、社会の中で自立できる仕組みを作る
手法：地域の資源を活かした、実践型の社会教育プログラムによって、社会で通用する力を身につける。
具体的な事業内容：
- 考える素材を得る（交流会等）
- 考え方を身につける（ワールドカフェ等）
- 考える機会を得る（ワークショップ等）

成果

自分の軸（やりたいこと）と向き合う機会を作る。自分の軸を絞り込む方法や考え方を身につける。自分の軸を定め、実現していく力が身に付く。

コーディネーター育成事業
（今回申請する新規事業）

対象

- 社会で通用する力をより身につけたい若者（主に 15 歳~29 歳）
- コミュニティ作りに関心がある。
- 行動に移すきっかけがつかめないでいる
- 多様な人と積極的に繋がりたいと考えている。

事業概要

目的：若者同士の学びあいを支援し、持続可能な運営体制を構築する
手法：参加型学習の講座を受講し、左記の事業での実践を通して、学びの場づくりのスキルを身につける。
具体的な事業内容：
- コーディネーター基礎講座（全 5 回）
- 若者の居場所づくり実践研修（全 5 回）

成果

同じ仲間の立場から、課題を抱える若者の伴走者として事業が運営できるコーディネーターを「20 名」育て、他地域でも汎用可能な運営体制の開発ができる。

支援者として好影響を与える

事業の将来像・ビジョン

生涯学習センターを核として、地域で学び、活動する若者が増え、まちが活性化する。

（4） 講座全体スケジュール、各回テーマ

■【前編】コーディネーターとしての心構え＆企画講座（全５回）

①9 月 22 日（土）10～12 時《オープン講座》

コーディネーターとは

小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）

②10 月 7 日（日）10～12 時

〈フィールドワーク〉

コーディネーター事業先進地へ【シブヤ大学】

榎本善晃さん（シブヤ大学事務局長・授業コーディネーター）

③10 月 14 日（日）10～12 時

地域資源を発掘しつなげるスキルとは

小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）

④10 月 20 日（土）10～12 時

講座を企画しよう+効果的な広報

山宮徳晃さん(元 Apple Store イベントコーディネーター／PeaTiX シニアエバンジェリスト)

⑤10 月 28 日（日）10～12 時

プレゼンテーション大会+フィードバック

（小口さん、山宮さん、文部科学省生涯学習政策局スタッフ、おとな大学事務局　ほか）

■ （後編）居場所の仕掛けづくり、もてなす側としての意識（全５回）

①11 月 10 日（土）10～12 時《オープン講座》

居心地のいい居場所とは

（駒澤大学総合教育研究部教授　萩原建次郎さん）

②11 月 23 日（祝・金）10～12 時

〈フィールドワーク〉

「居場所」先進地へ　co-ba library

中村真広さん（co-ba、co-ba library／株式会社ツクルバ）

③12 月 1 日（土）10～12 時
人がつながる仕掛けを知る・考える　～グループディスカッション～
小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）

④12 月 9 日（日）10～12 時
傾聴のスキルを知る・学ぶ・試す／ファシリテーション
樋栄ひかるさん（コミュニケーションコンサルタント）

⑤12 月 15 日（土）10～12 時
どんな居場所にしたい？プレゼンテーション大会
（文部科学省生涯学習政策局スタッフ、おとな大学事務局　ほか）

（5）　講師プロフィール

■まち処計画室　小口優子（おぐちゆうこ）さん
（前編①、③、⑤／後編③、⑤）
神奈川県藤沢市出身。都市計画コンサルタントを経て、豊島区の財団でまちづくりコーディネーターをしながら、2004 年に（有）まち処計画室を設立。現場に出ていると、地域の課題を解決する、すなわちまちづくりを進めるにはコミュニティづくりが大切だと痛感する日々。豊島区では、「豊島区まちづくりバンク活動助成」アドバイザー、「南長崎はらっぱ公園を育てる会」コンサルティング業務等を担当。

■シブヤ大学 事務局長 / 授業企画コーディネーター
榎本善晃さん（前編②）
早稲田大学第二文学部表現・芸術系専修卒。いったん就職した後、友人と有限会社テトルクリエイティブを創業。その後、リアルな″サードプレイス″がつくりたいなーと、2009 年よりシブヤ大学に参画。夜は代々木八幡で「おいしい日本のワイン　≡sun(さんさん)」というワインスタンドをやってます。シブヤ大学ツイッターの中の人です。

■PeaTiX シニアエバンジェリスト
山宮徳晃さん（前編④、⑤）

Apple のブランドストア、Apple Store にて 2003 年から約 10 年間イベントコーディネーターとして 2,000 を超えるイベントの開催を行う。また Apple Store の立ち上げに、国内外問わず参加し、Apple Store のオープニングイベントも主催。 2005 年から iTunes Store 普及のため、Apple Store 渋谷にて、数年間毎日音楽イベントを開催した経験も有り。2012 年 3 月より Orinoco Peatix 社に入社。PeaTiX のシニア エバンジェリストとして、イベント主催者の支援活動を統括。

■駒澤大学総合教育研究部教授
萩原建次郎さん（後編①）

社会教育、教育人間学を専門とする研究者。
研究テーマは居場所における学びと人間形成。若者の社会参画。
地域をまきこみ、若者とともに地域の居場所、多世代交流の場づくりに取り組んでいる。
共著に「子ども・若者の自己形成空間」（東信堂）、「若者の居場所と参加」（東洋館）など多数の著書あり。

■ツクルバ 中村 真広さん Masahiro Nakamura（後編②）
（株式会社ツクルバ 代表取締役 CCO／クリエイティブ・ディレクター）
1984 年千葉県生まれ。東京工業大学大学院建築学専攻修了。大学院時代に渋谷「みやしたこうえん」のスケボーパークの基本設計を担当。この経験を通じて、建築が生まれる前段階＝枠組みのデザインに興味を持ち、不動産ディベロッパーに新卒入社。その後、ミュージアムデザイン事務所にて、常設展示の企画など、空間を埋めるコンテンツづくりを経験した後、フリーランスのクリエイティブ・ディレクターとして活動。 2011 年 8 月に（株）ツクルバを設立。co-ba、co-ba library を渋谷にオープンし、2012 年 10 月にはシェアダイニングをコンセプトに掲げる飲食店「1K」を池袋にオープン。あたらしい「場」の発明を通じた、ソーシャル・キャピタルの構築を目指して活動している。

■樋栄ひかるさん

Ena Communication Inc. 代表、慶応義塾大学講師（プレゼンテーション／コミュニケーション）、ファカルティデヴェロッパー（FD）、教育プログラムコンサルタント

プレゼンテーション、ビジネスコミュニケーション、行動心理学、コーチング、リーダーシップ、ファシリテーション、英語でのコミュニケーションスキル養成など幅広いジャンルで、年間 150 回以上の研修・ワークショップを開催。受講者からの評価アンケートは毎回ほとんど 100 点。

2007 年春より慶応大学藤沢湘南(通称SFC)にて「プレゼンテーション技法」の講師も勤める。定員 30 名に対して毎年 200 名を超える受講希望者が出るほどの人気授業。近年は大学教授の教育力向上研修（ファカルティデベロプメント）も請け負い、日本の教育のイノベーションを使命に邁進中。

■進行・構成：山本絵美（おとな大学ディレクター）

映画祭スタッフ、映画情報サイトのスタッフ等を経て、ミニシアター系映画の配給・宣伝に携わる。2011 年より、若者支援を行う NPO 法人 NEWVERY に所属、同年 11 月より開校したおとな大学ディレクターを務める。

公式サイト：http://www.newvery.jp/

（6） 講座の参加者数、広報について

【講座】9 月 22 日（土）～12 月 15 日（土）(全 10 回)
全体参加人数（のべ）：139 名
参加年齢：18 歳～35 歳
申込人数：20.1 名/1 回の講座につき（全体平均）
出席人数：13.9 名/同上

【講座終了後の実践】（各 1 回ずつ開催、 合計 2 回）
3 月 2 日（土）「妊婦体験ジャケットをつくり、実際に着てアクティビティを体験しよう」
3 月 10 日（日）「自分の“働く”は自分でつくる! ～人と人をつなぐツクルバから見える、”オンリーワン”な歩き方～」

【3/2(土)】（チーム内での検証のための実践）
実施人数：8 名（うち、おとな大学事務局よりサポート 4 名）

【3/10（日）開講分】（参加者公募）
出席人数：15 名

■広報の方法
おとな大学公式サイトにて講座の概要を掲載。参加希望者には専用メールにて申込をしてもらった。主な広報手段としては、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)を活用（特に、おとな大学公式アカウントを持つ Twitter、facebook を活用）。また、これまでのおとな大学の参加者にメールマガジン（300 名程度）を送付。同時に、チラシを作成し、区の施設、みらい館大明、おとな大学で開講中の講座にて配布を行った。

その他の工夫として、【前編】【後編】ともに初回を〈オープン講座〉とし、このオープン講座自体が広報の切り口とできたこと、また、参加者には講座の雰囲気やテーマを知ってもらい参加のモチベーションを高めることにつなげられた。
9 月の募集時には定員以上の応募があったため、申込時にアンケートをして聞いていた「なぜ講座に参加したいのか？」という動機と講座のテーマは合っているかを確認し（テーマの違いが見られる方には個別に連絡し、やりとりを行った）、参加可能日程の多い申込者から選考を行った。
※開講後は、仕事や遠方からの参加が難しいなどの理由で辞退申請があったため、【後編】開始時にも追加募集を行った。（選考は【前編】の募集時と同じ条件）

2.「地域を学ぶ場に変えるコーディネーター養成講座」全 10 回　実施報告

各講座　実施内容

【前編】第1回　コーディネーターとは《オープン講座》

日時：9 月 22 日（土）10:00～12：00
場所：みらい館大明図書室
参加者数：29 名
講師：小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）
進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】
参加者が持っているコーディネーターのイメージを共有し、「コーディネーターとは」ということについて考える。
また、全 10 回の講座をできるだけ通い続けてもらうために、講座内容をしっかり共有できるよう誰でも参加が可能な《オープン講座》（事前申込制）とした。

【概況】
（導入）
人数が揃った段階で、本講座の目的とおとな大学について説明。
講師の小口さんから自己紹介。
（グループトーク、全体共有）
6 グループ（5～6 人）に分かれ、「コーディネーターのイメージ」と「コーディネーターに必要な要素」を考え、模造紙に書き留めた。
グループワークで話した内容をそれぞれ発表し、全体で共有した。具体的にイメージでは、「つなぐ役割」「裏方」「地域の相談役」など、必要な要素では、「人柄」「課題発見力」「コミュニケーション能力」といった意見が出た。
（小口さんの話）
小口さんより、コーディネーターに必要な基本的要素は「ニュートラルに接すること」「傾聴力」「プランニング力」「調整力」とし、 それらに加えて、個性が見える「＋α」の部分が重要であるとし、あわせて、コーディネーターとして関わったまちおこしや地域のイベントの実際の事例について紹介。
（小口さんと山本ディレクターとのトークセッション、質疑応答）
トークセッションは、互いにそれぞれが持っている、コーディネーターとしての「＋α」についてと、本講座を通して参加者自身の「＋α」を見つけてほしいといった内容だった。

・　質疑応答では参加者から「課題を発見するために心がけることとは？」などの質問があり、講師から「現場を経験し、統計データなどもあわせて活用する」といった回答があった。

【事務局の振り返り】

◇改善点

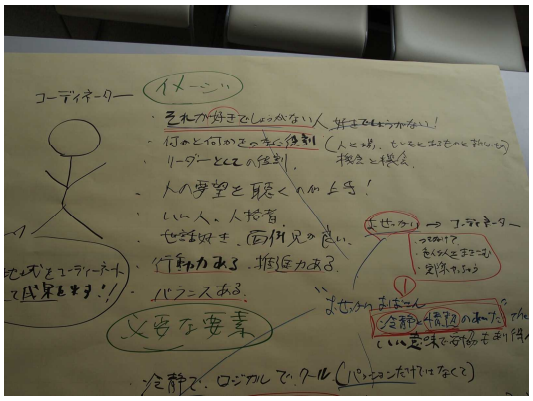
・　グループワークが盛り上がったことで、トークセッションの時間が少なくなってしまった。

〇　良かった点

・　グループワークの場面では、参加者が講座に主体的に参加する様子があった。

・　講師からの実際の事例紹介が参加者のより具体的なコーディネーターのイメージへとつながった。

【当日の様子】



【前編】第 2 回フィールドワーク　～コーディネーターの先進地シブヤ大学へ～

日時：10 月 7 日（水）10:00～12：00

場所：シブヤ大学事務局

参加者数：15 名

講師：榎本善晃さん（シブヤ大学　事務局長　／　授業企画コーディネーター）

進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事/おとな大学ディレクター）

【目的】

コーディネーターが活躍する先進地であるシブヤ大学にて、実際に地域コーディネーターとして働くための考え方やノウハウなどを学ぶ。

【概況】
実際にシブヤ大学の事務局に伺い、事務局長の榎本善晃さんによるスライドを用いた講演がスタート。

（講演内容）
① シブヤ大学について ②シブヤ大学のビジネスモデル ③学びとつながり（つながりは副産物）
④コーディネーターとして指針していること ⑤授業作りの要素とは（設計、準備、場作り）
まずコーディネーターを選考し、そこから授業の軸やタイムテーブルを決め、実際に参加者の立場になってシュミレーションしてみる。
榎本さんの話を踏まえ、参加者同士で感想や意見を交換。最後に講師との Q&A へ。

（Q＆A）
Q:シブヤ大学が考える面白さの基準は何か。
A:体系化はしていない。自分たちが生徒に成り代わって考えてみること。
Q:実現する為にどのような工夫をしているか。
A:授業の軸など基本的な要素をおさえた上で、基本にとらわれすぎず個人の+αの要素も取り入れ、面白さを優先すること。課題解決にとらわれすぎず、しなやかであること。

【事務局の振り返り】
◇改善点
- 講座 2 回目ということもあり、グループ内で意見交換が深まりきらなかった。もう少し問いに工夫や、時間を長く設けるべきだった。

〇良かった点
- フィールドワークという事で、地域コーディネートの先進地を見る事で具体的なイメージを持てるようになったという意見が多かったこと。

【当日の様子】

【前編】第 3 回　～地域資源を発掘しつなげるスキルとは～

日時：10 月 17 日（日）10:00～12：00
場所：みらい館大明
参加者数：12 名
講師：杉本カネ子さん（NPO 法人いけぶくろ大明理事長）
小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）
進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】
講師の杉本カネ子さん、小口優子さんにお話を伺い、地域資源を発掘し活用するスキルについて学ぶ。補足として、豊島区の地域資源がまとまった資料（「池袋仲通り商店街　MAP」「新版豊島区史跡めぐり」「豊島区生涯学習ガイド」）を配布。
【概況】
池袋3丁目に所在する閉校施設「みらい館大明」を運営する NPO 法人いけぶくろ大明・理事長の杉本カネ子さんとファシリテーターとしてまち処計画室コンサルタントの小口優子さんにお越し頂き、地域の特徴を掴み、課題を解決することについて考えを深めていく。

・　冒頭は、コーディネーター養成講座の趣旨と前回までの流れの共有。
　杉本さん、小口さん、山本ディレクターによるトークセッション。杉本さんより「防災」の拠点となっている「みらい館大明」の成り立ちをお話いただく。平常時は地域のサークル活動や演劇・ダンスの練習、イベント・講座の開催の場として活用されているが、地域の災害避難所でもある。
　「通常、学校が廃校になると避難場所の指定から外れる場合が多いが、みらい館大明では周辺住民からの熱心な働きかけもあり、今も継続して災害時の避難場所となっている。また、定期的に防災訓練を実施することで、地域の防災の拠点として位置づけている」。

・　続いて、地域（みらい館大明）を舞台とした学ぶ場をつくっていく例として、山本ディレクターより若者支援事業「おとな大学」の講座について紹介。（特に、みらい館大明や豊島区の「資源」を活用した参加実践型の講座「育てるブックカフェ講座」を紹介。※資料集 P41参照）

・　受講生は、第 1～3 回の講座を踏まえ、実践へとつなげる「企画」立案へ。第 5 回に、その企画についてプレゼンテーションを行う。
　企画のテーマは①若者の学び場　②子供の教育　③多世代交流　④異業種交流、連携。例えば「みらい館大明で、おとな大学で講座を行うとしたら？」と設定。ここから受講生は関心があるテーマを選び、チームにわかれていく（3～5 名程度）。早速活発なアイデア・意見交換がされ、具体的な企画が見えてきているチームもあった。

【事務局の振り返り】

◇ 改善点

・ 開場の準備時間が少なく、少しバタバタしてしまったこと。事前の準備物確認を徹底する。

○ 良かった点

・ 各企画に対して杉本さんから的確なアドバイスがあり、企画が具体的になったという意見が多かったこと。

・ 同じ問題意識をもった人同士が交流し、意見交換する場を作れたこと。

【当日の様子】

【前編】第4回　講座を企画しよう+効果的な広報

日時：10 月 20 日（土）10:00～12：00

場所：みらい館大明図書室

参加者数：12 名

講師：山宮徳晃さん(元 Apple Store イベントコーディネーター／PeaTiX シニアエバンジェリスト)

進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】

具体的な企画方法や効果的な広報の方法を学ぶ。

【概況】

（導入）

・ チームごとにテーブルに分かれて着席してもらった後、前回のおさらいと今回のスケジュールを確認。

・ 講師の山宮さんから自己紹介。

（山宮さんのお話）

企画を考える上では「個人個人が最大限に動いているチームが必要である」「企画を実践していくためにも、リーダーはひとり決めること。ただし、リーダーが必ずプレゼンテーションを行うのではなく、他に得意な人がいたら任せる。チーム内で得意なことをそれぞれ担当していくと最大限に動くチームになる」「それぞれ別々の視点・意見を持っているメンバー全員が「おもしろい」と思える企画である」「オリジナリティを大切にする」といったことが重要という話だった。

（各チームへのフィードバック、プレゼン・告知のポイントについて）

事前に提出してもらった各チームの企画アイデアシート（※資料集 P43～46参照）をもとに、山宮さんがそれぞれフィードバックを行った。

－若者の学び場チーム：〈案〉みらい館大明内の元図書室をつかった若者を対象としたブックカフェがオープンするということから、若者自身が地域の方々と一緒に「本棚」を作る
→「池袋の地域性に合った材料を使ったらどうか、 また本棚をつくることがどんな学び何につながるのかより具体化できるといい」

－多世代交流チーム：〈案〉大明との親和性、どの世代にも必要な「防災」をテーマにした学ぶ場をつくる
→「池袋の地域特有の、起こりうる災害があるのか調べる、例えば地域のお年寄りに話を聞くのはどうか」

－異業種交流チーム：〈案〉働きながらも自分の仕事や将来について悩む 20 代～30 代の若者を対象とした人生経験豊富な地域の先輩たちへの仕事相談会を開く
→「仕事を辞めてしまった若者の選択肢は広いとはいえない。どのように生きていけるか、新しい働き方を考える、という視点があるといいのではないか」

－子育て・子どもの教育チーム：〈案〉地域資源を活用して子どもたちが社会教育を受けられる場を楽しく提供する
→「子どもを考えるときは同時に、母親の視点も必要ある」

・ 次回プレゼンテーションで気をつけるべきポイントとして、「最大7分間でチームの個性が一番伝わる方法にする」「プレゼン内容の濃度が薄くなってしまうので、プレゼン時間は無理に引き延ばさない」などといったことが挙がった。

・ 広報の仕方として、「前パブ」「中間パブ」「後パブ」を意識すること（前パブ：イベントの告知→中間パブ：イベント中の様子を SNS で実況など→後パブ：次回参加したくなるように、終了後のレポート）など山宮さんが実際に行っている具体的な方法を学んだ。

（グループワーク）

山宮さんからのフィードバックを踏まえて、改めて企画についてチーム内で話し合った。グループワーク中は、参加者から山宮さんへ積極的な質問があり、山宮さんも一緒にグループに入りながら企画のブラッシュアップを行った。

（全体に向けて）

最後に山宮さんから全体に向けて「企画の極意は、楽しみ方は 1 パターンとは限らないこと、他者からの意見は真摯且つ柔軟に受け入れることである」と話し、今回の講座を締めくくった。

【事務局の振り返り】

◆改善点

・　山宮さんからだけではなく、他のチームメンバーからのフィードバックがあってもよかった。

〇良かった点

・　ぼやけていた企画が山宮さんの明確なフィードバックによって方向性が見えてきたチームが多かった。

・　チームメンバー以外の他者（且つ企画することに慣れている人）からの貴重な意見をもらえる場となった。

【当日の様子】

【前編】第5回　プレゼンテーション大会+フィードバック

日時：10 月 28 日（日）10:00～12：00
場所：みらい館大明図書室
参加者数：合計 12 名
講師：小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）、山宮徳晃さん（PeaTiX シニアエバンジェリスト）、兼定岳史さん（文部科学省生涯学習政策局スタッフ）
進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】
チームの企画のプレゼンテーションを行い、後編に向けてさらに企画をブラッシュアップする。
【概況】
（導入）

・　チームごとに事前に提出してもらったアイデアシート（※資料集Ｐ43～46参照）を配布資料として用意。
・　（各チームのプレゼン）
　＜制限時間7分＞＜各チームの個性がわかる、企画の楽しさがわかること＞＜プレゼンの手法は自由＞という条件で、各チーム順番にプレゼンを行った。
　※各チームのプレゼンテーション資料は、資料集 P47～59を参照。
　（※異業種交流チームは全員欠席のため省略）

　ー若者の学び場チーム『地域の零細企業と協力して、「本棚」をつくる』：本棚をみんなで手作りして読書をすすめることを通して、人とのつながりを持たせることと、本を通して夢や興味を持たせることがねらい。
　ー多世代交流チーム『みんなで守るいけぶくろ（防災）』：災害に備えた安心マップを作る。各世代や個人の強みを活かして助け合い、課題を解決することを目指す。
　ー子育て・子どもの教育チーム『妊娠後期の女性を対象にした街歩き』：運動ができる機会の創出と、出産前の妻を助けるために夫に何かできることはないか」という想いから企画。

（講師・おとな大学事務局からのフィードバック）
　各チームのプレゼン終了後、講師・おとな大学事務局からフィードバックがあった。
　ー若者の学び場チーム：地域の DIY 好きなおじさんを巻き込んで地域とのつながりを持つとおもしろい。
　ー多世代交流チーム：区に元からあるマップを活用してもよい。ゲームのような楽しさを入れることが重要。
　ー子育て・子どもの教育チーム：妊婦ベストを使って夫にも妊娠を体験できるようにするという

方法もある。

（グループワーク）

フィードバックを踏まえて自分たちの企画についてチーム内で振り返り。

振り返った内容をチーム毎に発表し、全体で共有した。

（全体に向けて）

最後に、講師の方々から全体に向けて「自分たちのチームだけで企画を行うのではなく、行政や地域の他の団体とコラボする視点も持つこと」というアドバイスと「コーディネーターとは“役者”である。各々の場に合った多様な役割を“演じて”いくことが必要」という話で締めくくった。

【事務局の振り返り】

◇改善点

・ 時間的に厳しいが、前編の最終回として参加者が全 5 回を通した振り返りとその共有があってもよかった。

〇良かった点

・ 発表方法は自由としたことで、写真やイラストを使ったわかりやすいスライドでの発表やチームメンバー間での対話型の発表など、各チームそれぞれ工夫してプレゼンテーションをしていた。

・ プレゼン内容について、実際にコーディネーターとしてすでに活躍する講師の方々、地域資源を活用して活動している NPO 法人みらい館大明、行政機関である豊島区といった、講師・事務局それぞれの視点からの多様なフィードバックができた。

【当日の様子】

【後編】第１回　～居心地の良い場所とは～

日時：11 月 10 日（土）10:00～12：00
場所：上池袋コミュニティーセンター
参加者数：　12 名（うち見学者１名）
講師：萩原建次郎先生（駒澤大学総合教育研究部教授）
進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】
前編で提案した企画の実施に対して、参加者が集まる場所＝居場所と捉え、参加者の学びや経験を深めるために「居場所」の特性、更には居心地の良い場所の条件や作り方を学ぶ。「参加者と運営者にとって、どんな居場所であるのがよいか」という視点を強化しながら今後の企画作りに活かしていく。
【概況】
・【後編】からはじめて参加する方もいるため、まずコーディネーター養成講座の趣旨と前編までにおこなってきたこと、 後編で学ぶ事を確認。
・参加者の「居場所」のイメージを共有。そこから「居場所」の意味についての人間学的考察、「居場所」が生まれうる場の条件、場を運営していく上での留意点（対象者の自発性を尊重する場、すなわち何もせずにぶらぶらしてもよい場にする）等、先生が運営に携わるコミュニティカフェ等の事例紹介とあわせてご講演いただく。
・なぜ「居場所」というテーマが求められているのか？→今の社会には「存在を透明視する視線」、「子供や若者を排除する都市空間と視線（邪魔者扱いの視線、冷たい視線）」があり、居場所がないと感じる若者が多くいるため。
・「居場所」に必要なことについて→「親身になってくれる他者（親切にすること）」「聞いてくれる他者」「デザインの自由を保障する場」。影となっている時と場を安易に奪わないこと。本当に危険な時と場を居場所として求めるようになる可能性がある。
・居場所とは何か→「在る」と「居る」の違いからひもとく。「居る」とは自分という存在感とともにあり、その言葉には生命のシグナルを感じ取る意味が含まれている。
・居場所づくりのスタッフとしての在り方→さりげない声掛けを積み重ねる。場の過ごし方や使い方を一緒に決めていく。
・居場所が含む両義性→他者や周囲の環境との関わりで生まれるため「動く」、かかわりの積み重ねにおいて場所や他者へと「根付く」。根付きつつ動くという緊張関係をはらむ。
・居場所づくりの展望→「社会と個人と結ぶ中間に『小さな社会』を作る」。お互い顔の見える小さなスケールで多様な他者が行き交い、活き活き関わりあえる場。自らやってみたいことを他者とともに積み重ねていける場。
・「同時代を共に生きる若者と『小さな社会』を創る」こと、大人や他者とともに場を作る経験は、

責任ある大人へと生きる意思を育む。

・ 最後に参加者と感想を共有した。

【事務局の振り返り】

◇ 改善点

・ 参加者同士の話し合いや意見交換が盛り上がり、時間がもう少しほしかったという意見もみられた。参加者の意見交換の時間について、長めにとる必要がある。

◇ 良かった点

・ 参加者の方が、それぞれ自分の企画にどう落とし込むかという視点で萩原先生のお話を聞いているのが強く感じられたこと。

・ 例えば、居場所が静と動の両方の性質を持ち、固定化・同質化のリスクと多元化する可能性をあわせもつという視点など、参加者それぞれ新しい気づきや、イメージの整理につながっていたこと。

【当日の様子】

【後編】第 2 回 〈フィールドワーク〉「居場所」先進地へ co-ba library

日時：11 月 23 日（金・祝）10:00～12：00

場所：co-ba library（渋谷）

参加者数： 13 名

講師：中村 真広さん（株式会社ツクルバ 代表取締役 CCO／クリエイティブ・ディレクター）

進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】
co-ba library の中村真広さんにお話を伺い、具体的な居場所の作りや提供の仕方を学ぶ。

【概況】
渋谷にあるコーワーキングスペース co-ba library にて、中村真広さんより「居場所」づくりの実践について伺う。

- 前回までのコーディネーター養成講座の内容を共有。
- 中村真広さんのお話。co-ba library ができる過程やコーワーキングスペースとして大切にして 5 つのキーワード（「open process」、「open end」、「good noise」、「CO gradation」、「social capital」）など。
- 中村さんから参加者への問いかけ。「みなさんはどんなコミュニティアイデンティティに共感しますか？」
  参加者に寄る回答例：仕事先、地元（住んでいる場所）、地球など。
- 近くに座っている３～４人ごとにグループに別れ、意見交換。
- 最後に Q&A と参加者の感想を共有。

（Q&A）
Q: コミュニティーはどのようにつくるか。
A: Co-ba は植物みたいな物。種をまいて水をあげるとこまではやるが、あとは統率できない。
　私たちは参加者が育つように添え木をするだけで無理矢理交流させるようなことはしない。
Q::しっかりルールを決めておくべき事と、コミュニティーに委ねる事の見極めは？
A::ケースバイケースではあるけれど、一貫しているのは「決めすぎない事」。サービス提供者と、利用者の境界線をなるべくなくす。スタッフは学級委員みたいな存在と捉えている。

【事務局の振り返り】
◇ 改善点
・ 当日の天候は雨、初めて co-ba library に訪れる参加者が多く、会場まで詳しい指示が入っている地図を準備できるとよりよかった。
◇ 良かった点
- 講師の方が魅力的で、話の内容が面白かったという意見が多かった事。
- 参加者全員がかなり満足、または満足と回答してくださり、参加者の期待に答える事ができた事。

【当日の様子】

【後編】第3回　人がつながる仕掛けを知る・考える　～グループディスカッション～

日時：12 月 1 日（土）10:00～12：00
場所：みらい館大明
参加者数：13 名＋見学者 3 名
講師：小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）

進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）
【目的】
「学ぶ場＝人が集まる、人がつながる場」という視点で、【前編】で作成した自分たちの企画を見つめ直し、グループディスカッションを通して具体的な仕掛けを考える。
【概況】
（導入）
・チームごとにテーブルに分かれて着席してもらった後、今回のスケジュールを確認。
・各チームに【後編】からの参加者が新たに入ったため、前編で企画した内容をチーム内で共有。
（グループディスカッション・各チームへのアドバイス）
・講師の小口さんと山本ディレクターが各テーブルを周り、チーム内の企画内容についてのブラッシュアップ・ディスカッションに参加。参加者の疑問や質問を一緒に考え、アドバイスをしていった。
　－多世代交流チーム『みんなで守るいけぶくろ（防災）』：防災は行政・地域がすでに取り組んでいるので連携するといい。一方で普段防災イベント等に来ない世代を呼ぶ「集客」につながる切り口、行政・地域がやっていない（多世代交流チームだからこそ考えられる）切り口・要素を考えることが必要。

ー子育て・子どもの教育チーム『妊娠後期の女性を対象にした街歩き』:防災同様、行政が取り組んでいるテーマなので連携の可能性を模索しながら、行政ではできない部分を企画者が行うとよい。

ー異業種交流チーム『20 代後半～30 代前半の社会人を対象にした「働き方」相談会』:「働く」をテーマに据えているので、おとな大学と連携した内容にできる可能性あり。1つの例として、おとな大学で開講中のワールドカフェ形式の講座(「人生のギアチェンジカフェ」/学生から、様々な業種で働く社会人まで幅広く参加)をモデルにする。

ー若者の学び場チーム『地域と協力して、「本棚」をつくる』:「本棚」をつくることで学べることを、参加者にどのように伝えるのか(PR を行うのか)。また、みらい館大明周辺の地域の方々にどんな協力をしてもらいたいか、具体的にする必要がある。

(最終回(プレゼンテーション大会)についての説明)

・ 最終回について「今回のアドバイスを踏まえてブラッシュアップした内容を規定の企画書にまとめる」「最終プレゼンテーションの条件は前編と同様だが(7 分間まで、形式は自由)、今回は実現性・具体性をポイントに置いて、企画書の中身に力を注ぐ」「不明点や疑問点がある場合は、アドバイザーでもある小口さんに質問をすること」を説明。

【事務局の振り返り】

〇良かった点

・ 今後は考えていくべき点として区ですでに進められていることなど、既存の取り組み・企画と差別化しなければならない点はあるが、各チームそれぞれにアドバイスする時間を設けたことで、チームの関心や課題にあわせたアドバイスができた。

・ 企画について参加者が考えている率直な意見・疑問を聞ける機会となった。

【当日の様子】

【後編】第4回　傾聴のスキルを知る・学ぶ・試す／ファシリテーション

日時：12 月 9 日（日）10:00～12：00
場所：みらい館大明図書室
申込み数：　9 名
講師：樋栄ひかるさん（Ena Communication Inc.　代表、慶応義塾大学講師）
進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】
講師の樋栄ひかるさんによるワークショップを通して、コーディネーターに必須な「Yes,and」（否定するのではなくいったん受け入れてみて、そこに自分の考えをのせて相手に返すこと）を体感する。

【概況】
（導入）
・　参加者・講師共に円になって着席後、講師の樋栄さんから自己紹介。

（Yes,and）
・　「紅茶派」vs「コーヒー派」や「犬派」vs「猫派」など、2 つに分かれて自分が選んだものの良いところを互いに言い合った。このとき、「相手の言ったことに対して否定せず、肯定したうえで自分の意見を言う」というルールを設けた。

（メタ認知）
・　「自分を色で例えると」という質問についてそれぞれ理由と共に発表。参加者の中には「感受性が豊かだから」「自分には色々な要素があるから」と虹色を選ぶ人、「昔と色が変わった」といった人がいた。他にも「自分を動物に例えると」といった質問もあった。

（「き（お）く」、「Be Present」、「No“む”（難しい、無理など）」）
・　名前回線ゲームを通して、コーディネーターにとって重要である「今何が起こっているかを理解するためにしっかりその場に参加し、聴き、記憶する」ということを学んだ。

（自分のくせを知る）
・　2 人組になり番号を順に言い合うゲームや拍手のリズムを合わせるゲームから「常に自分のペースでできた」「あせってしまった」等、自分のくせや性格に改めて気づく機会となった。

（自分のタイプを知る）
・　4 つのタイプ（主導型、感化型、安定型、慎重型）から自分を分析。複数の型をまたがっている人が多く、同じタイプの人と選んだ理由について話し合い、共通点を発見した。

【事務局の振り返り】
◇改善点
・　今回のように講座の【後編】ではなく、【前編】に行うと受講生の親交を深める効果が早くから得られたかもしれない。

〇良かった点

・　頭だけでなく、身体を使った内容となっており、参加者の活発な発言や笑顔が見られた。
・　アイスブレイクの重要性や工夫の仕方を実際に体験して学ぶことができた。

【当日の様子】

【後編】第 5 回　～どんな居場所にしたい？プレゼンテーション大会～

日時：12 月 15 日（土）10:00～12：00
場所：みらい館大明図書室
参加者数：12 名
登壇者（フィードバック）：
佐藤貴大さん（社会教育課地域・学校支援推進室　地域学習活動企画係長）
小口優子さん（まち処計画室　コンサルタント）
岡田麻矢（豊島区教育委員会事務局教育総務課庶務係　社会教育主事）
漆原和代（豊島区文化商工部学習・スポーツ課　管理グループ）
阿部剛　（NPO 法人いけぶくろ大明）
進行：山本絵美（NPO 法人 NEWVERY 理事／おとな大学ディレクター）

【目的】
各チームはこれまで練って来た企画について最終プレゼンテーションを行い、登壇者からのフィードバックをもとにさらに企画を実行に向けて練っていく。
【概況】
（導入）
・　チームごとに事前に提出してもらった「企画書 2.0」を配布資料として用意。
（各チームのプレゼン）
・　全 10 回の講座の最終回として、前編第 5 回と同様に、＜制限時間 7 分＞＜プレゼンテーションの形式は自由＞という

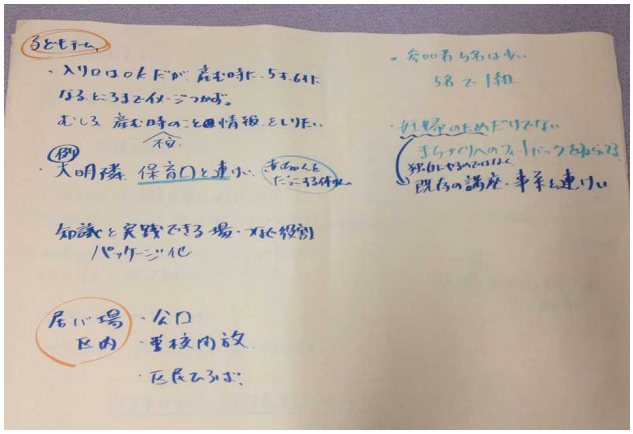
・　条件で、各チームが企画の実践に向けてプレゼンテーションを行った。
※各チームのプレゼンテーション資料（企画書 2.0）は資料集 P60～63を参照。

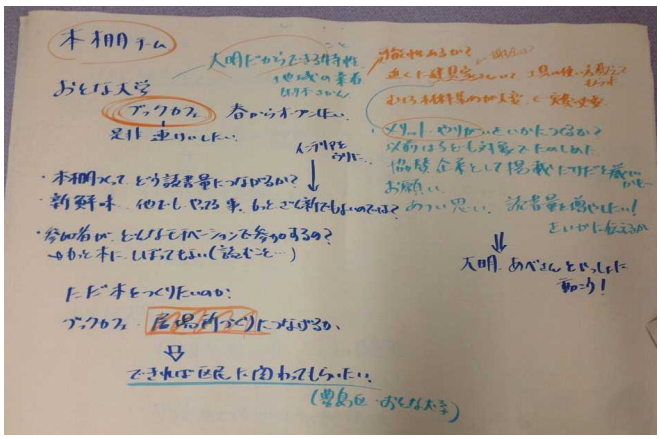
—若者の学び場チーム『本棚作り』：本棚を通じた学びと人とのつながりを創造することを提案。実際に DIY で本棚を作る事でおとな大学とコラボを検討。「本」「読書」を身近に感じさせ、若者の読書量を増加させるような仕掛けを目指す。
—多世代交流チーム『みんなで作る安心 MAP プロジェクト』：小学生や車椅子の方、学生ボランティアなど様々な方が参加できる大明周辺の防災訓練。炊き出し体験などを通して、災害時の対応を学ぶと同時に地域のつながりを強める。
—異業種交流チーム『新しい働き方スタートアップセミナー』 ：若者社会人を対象とした働き方講座。本業以外に仕事を持つ先輩社会人を講師に呼び、多様な働き方を学ぶ。
—子育て・子どもの教育チーム『プレママのための安心子育て街歩きツアーin 池袋』：豊島区が安心して子育てできる地域であることを伝えたいという思いから、実際に豊島区にある子育てスポットを巡り、インターネットに載っていないローカルな情報を伝える。
（各プレゼンに対してのフィードバック）
・　全てのチームのプレゼンテーション終了後、登壇者から各チームへのフィードバックがあった。フィードバックの内容は、参加者の前で小口さんが模造紙に書き留めた。（下記写真参照）
—若者の学び場チーム：本棚を作ってどう読書量をあげることにつなげるか。他でもやっていることが多いので、もっと斬新なものがあっても良い。
—多世代交流チーム：1 回完結型は参加しやすくて良い。食事や町歩き保険代もあるので実費負担があってもよい。
—異業種交流チーム：おとな大学、学校の跡地でやる意味を深めないといけない。まずは杉本さんにヒアリングから始めてみては？
—子育て・子どもの教育チーム：5、6歳のときの話より、むしろ産むときの情報を知りたい。独自でやるのではなく、既存の講座や事業と連携してはどうか。

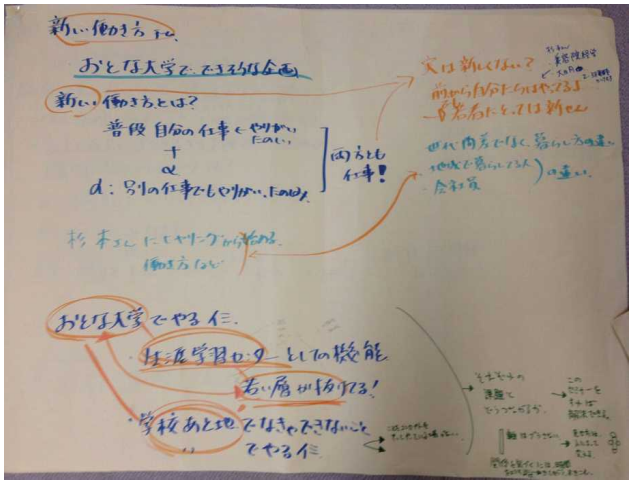
【事務局振り返り】
◇ 改善点
・ これから実践に向けて進めていく上で、地域を巻き込んでいかに他で行っていることと差別する必要がある。
・ 具体的に企画を練るには、期間が少し短かったという意見があったこと。
〇良かった点
・ 各チームがおとな大学・みらい館大明（＝地域）で企画を実践する意味を意識して企画を考案していた事。
・ 講座後の実践につながる精度の企画が出来上がっていた事。

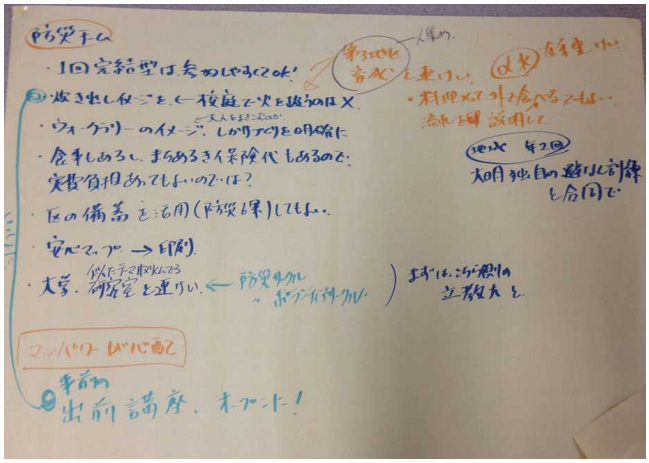
【当日の様子】

【フィードバックの写真】









３.「企画」から「実践」へ

２チーム（子ども班、異業種チーム）について

【実践】（各 1 回ずつ開催、 合計 2 回）
3 月 2 日（土）「妊婦体験ジャケットをつくり、実際に着てアクティビティを体験しよう」(子ども班)
3 月 10 日（日）「自分の“働く”は自分でつくる! ～人と人をつなぐツクルバから見える、”オンリーワン”な歩き方～」（異業種チーム）

【3/2(土)】（チーム内での検証のための実践）
実施人数：8 名（うち、おとな大学事務局よりサポート 4 名）

【3/10 開講分】（参加者公募）
出席人数：15 名

12 月 15 日（土）第 5 回の最終プレゼンテーションで提案された企画をもとに、チームとミーティングを重ねながら、2013 年 3 月までに 2 チーム「子ども班」「異業種チーム」が【実践】までを行った。
※2 チームの【実践】企画書は、資料集 P61～62を参照。

【実践1】 実施内容

（1）妊婦体験ジャケットをつくり、実際に着てアクティビティを体験しよう
日時：3 月 2 日（土）10:00～16：00
場所：みらい館大明図書室
実施人数：8 名（主に子ども班メンバー ＋ おとな大学事務局よりサポート 4 名）

【目的】（※企画書 P64より）
イクメンなど男性が育児に関わる機会は増えているなか、体験キットが高額であることも影響し、「妊婦」について知り、体験できる機会がまだまだ少ない。男性だから、と境界線を引いてしまうのではなく、同じ経験を疑似で知る事で、知識だけでなく経験値として深めていく。